

連載 名画で読む「骨」の物語

第3回

# 骨なしヴァランタンとロートレック

中野京子

作家・ドイツ文学者

19世紀末のバリ。小高いモンマルトルの丘では、かつての僻村の名残たる風車をトレードマークにしたキャバレー「ムーラン・ルージュ」（「赤い風車」の意）が大勢の客を引き寄せていた。人々は着飾って酒を飲み、ホールで踊り、娼婦を物色した。何より熱狂したのは、プロのダンサーたちが踊るダイナミックで猥雑なシャユール（＝カンカン）だった。

開店はエッフェル塔が建設された年と同じ、1889年。2年後にはロートレックのポスター『ムーラン・ルージュのラ・グリユ』が発表されて大評判となり、店の人気に一役も二役も買った。「ポスターを芸術の域へ高めた」と讃嘆されたこの四色刷リトグラフは、文字、人物、色彩の配置が大胆、かつ斬新で、今なおデザイン性の高さと魅力を失っていない。

中央で足を高く上げ、スカートを翻して激しいカンカンを踊るのが、タイトルのラ・グリユ（「大食い」の意）。モンマルトルのスター・ダンサーだ。手前には相手役の特異なシルエット。極端な鷲鼻、突き出た顎、山高帽をかぶり、どこかくねくねして見える。彼もまたダンスの名手として知られていたが、どれほどアクロバティック

に踊ったかは、そのあだ名を聞けば想像できる。「骨なしヴァランタン」というのだった。

本ポスターで一躍脚光を浴び、その後も骨なしヴァランタンを何度か描いたロートレックは、自身、骨に難を抱えていた。

正式名は、アンリ・マリー・レイモン・ド・トゥルーズ＝ロートレック＝モンファ。8世紀のシャルルマーニュ（カール大帝）時代までさかのぼれるほど、名門中の名門伯爵家の御曹司。おそらくプロの画家としては、空前絶後の身分の高さだ。男女ともに——領地管理は別として——実質的な労働で金銭を得るのは恥と思う大貴族が、いったいどうして画家になったかといえ、それまた骨に関係している。

ロートレックの身長は、せいぜい152cm程度。ただし生まれつきの小人症ではない。上半身はごく普通の成人男性なのに、下半身がまったく成長できず極端に短い。写真も残っており、尊大な父親にとっては期待外れの息子だったろうし、本人も階級と身体の齟齬に激しく悩んだはずだ。何しろヨーロッパでは、日本のいわゆる「蒼白きインテリ」の存在は認めず、エリートは頭脳明晰と